

●第1回アフリカ日本語教育会議

(2019年9月27日, エチオピア: アディスアベバ)

報告者: 伊藤 茉莉奈・サイティマイ (早稲田大学, 参加者)

2019年9月27日～29日にエチオピアのアディスアベバで第1回アフリカ日本語教育会議が開催され、サブサハラ・アフリカ12カ国とエジプト及び日本から70名が参加した。会議の主催はエチオピア日本語教師会(JLTAE)であり、テーマは「アフリカ発展のための日本語教育」であった。3日間にわたり各参加国からの日本語教育事情報告、各国文化紹介ワークショップ、日本語教育における研究発表、模擬授業等様々な活動が行われた。

会議1日目は、主催者、在エチオピア日本大使館、国際交流基金カイロ日本文化センターの代表からの開式挨拶のあと、サブサハラ・アフリカ12カ国(コートジボワール、ガーナ、ベナン、カメルーン、コンゴ、ザンビア、南アフリカ、タンザニア、ケニア、エチオピア、モザンビーク、マダガスカル)とエジプトの其々の国の代表による日本語教育事情の報告が行われた。報告では、各国の日本語学習者数、日本語教材の状況、日本語教育機関数、日本語能力試験受験者数、今後の各国・各地域の日本語教育が目指す方向性についての情報が提供された。最後に、一つのスポンサー企業から海外人材の日本企業への転職サポートの仕組みについてのプレゼンテーションがあった。その企業では、「暮らしたいところで思いっきり働く」をビジョンとして掲げ、日本語のレベルアップや日本ならではの価値観や働き方の理解、母国のマーケットやトレンドの把握、そして海外人材一人ひとりのキャリアパスを重視した「優良企業」への転職を支援している。

会議2日目は、エチオピアダンス、ケニアの乗り合いバス、マダガスカルの食事のマナー、タンザニアの食べ物、ザンビアのお祭り、エチオピアの文字といった各参加国の学生による文化紹介が行われた。そして、「異文化衝突ケースを用いた会話授業」、「国際理解と日本語学習のための非日本語母語話者間のオンライン交流」に関する実践報告、スポーツ留学生の学習リソース、Can-do課題分析、アフリカにおける日本語韻律教育の可能性に関する研究発表が行われた。最後に、会話の模擬授業と日本語教材作成のワークショップが実施された。模擬授業では、参加者全員が学習者役になり、提供された一つのテーマについて3/2/1(同じテーマでそれぞれ3分、2分、1分で話す)形式で会話の流暢さを強化する目的のタスクに取り組んだ。日本語教材作成のワークショップでは、参加者全員をグループに分け、興味を持っているテーマについてモデル会話を作成した。

これらの活動を通して、短期間に各国から参加した教師と活発で有意義な意見交換ができた。例えば、オンライン交流はネット環境が整っている国・地域では有効であるが、ネット環境が整備されていないエチオピアのような国・地域ではオンライン交流自体が難しいため、現地にいる日本語話者が担う役割が大きくなることや、その役割はどのようなものかといった議論ができた。

会議3日目は、ビジネス日本語についての研究発表・実践報告、初級ビジネス日本語の模擬

授業、日系企業とアフリカ人材に関する座談会が行われた。アフリカにおいて、学習者の日本語学習の目的は「将来の就職・仕事」が多い(国際交流基金 2015 調査)。一方、企業が外国人材に求める日本語レベルは高く、日本語の教科書を手に入れることすら難しいようなアフリカ諸国では、学習者の目的に即した教育がなかなかできていないという現状がある。限られた教材、学習時間、リソースの中で、人間関係の構築を志向する教育を行っていく必要性が指摘された。

最後にアフリカにおける日本語教育の発展に向けて声明文が発表された。声明文には、「1. 私たちは、アフリカにおける日本語教育を通じてアフリカと日本との相互理解と友好関係が促進されることをめざします。 2. 私たちは、アフリカにおいて日本語教育にたずさわる人びとの連帯を通じて日本語教育の発展につとめます。 3. 私たちは、アフリカにおける日本語教育の現状について積極的な情報発信をおこないます。 4. 私たちは、日本語を学んだアフリカの人びとが、さらに日本への関心を高め、学びを継続するだけではなく、日本の社会、文化、経済とのつながりを深める多様な機会をもつことができるように努力します。私たち自身もアフリカについて学ぶことを怠りません。 5. 私たちは、アフリカにおける日本語教育を通じて、国際社会の一員としての日本がアフリカの持続的な発展に対して積極的な貢献をすることを求めます。 6. 私たちは、アフリカにおける日本語教育の発展のために必要な支援が、自助、共助、公助あるいは個人、民間、政府を問わず迅速かつ有効におこなわれることを求めます。」と記された。

3日間という短い期間にはあったが、参加者は、サブサハラ・アフリカとエジプトの13カ国をはじめ、アフリカ全体の日本語教育事情について多くを学ぶことができたと思われる。伊藤は、現地に赴き、そこで生活する人々、日本語教育に携わる人々と実際に交流できたことで、「富める国」としての日本像をアフリカ地域の人びとの目を通して見ることができた。カメルーンの代表者が、「カメルーンの子どもの成長が日本の子どもの成長と同等になるようにしたい」「日本語学習を通して、利己的で怠け者なアフリカ人に、日本人のように仕事を愛し、互いを尊重できるようになってほしい」と語っていたことが、特に印象に残っている。国家間の非対等的な捉え方やステレオタイプを乗り越え、日本語をテーマに、互いに学び合う関係性を構築できるような日本語教育の発展の可能性が期待される。

今回の開催の日程と場所は未定だが、エチオピア日本語教師会 (JLTAE) のホームページ (<http://www.jltae.ml/>) を参照されたい。